

むかし、あるところに、貧乏な兄弟がふたりで暮らしていました。弟はぐつといいました。

ある日のこと、親の法事に、和尚さまを頼んでお経をあげてもらうことにしました。兄さんは、弟のぐつに、

「おまえ、お寺に行って、和尚さまをお迎えしておいで」といいました。

「うん、わかった。何ていえばいい？」

「きょうは、親の法事だから、来ていただけますかっていえばいいんだ。和尚さまは、赤い衣を着ているから、すぐにわかるよ」

ぐつは、さっそくお寺に行きました。

門を入ると、お寺の庭に、にわとりがいました。にわとりは、赤い胸の毛をふさふささせていました。ぐつは、赤い衣を着てるからこれが和尚さまだなんて思って、にわとりに向かって、

「きょうは、親の法事だから、来ていただけますか」といいました。にわとりは、

「こけこっこー」といいました。

ぐつは、家に帰って、兄さんに、

「和尚さまは、こけこっこーっていったよ」といいました。兄さんは、

「それはにわとりだ。和尚さまは、もっと奥においでになる。もういちど行って来い」といいました。

ぐつは、またお寺に行って、奥に入ると、赤い牛が寝ていました。ぐつは、牛に向かって、

「きょうは、親の法事だから、来ていただけますか」といいました。牛は、

「もうー」と鳴きました。

ぐつは家に帰って、

「和尚さまは、もうーっていったよ」といいました。兄さんは、

「ばか、それは牛だ。和尚さまは、お座敷の奥にすわっておられるかただ。もういちど行って来い」といいました。

ぐつは、三度目にやっと和尚さまに会えました。

「きょうは、親の法事だから、来ていただけますか」

「そうか、それでは行つてやろう」

ぐつは、家に帰つて、兄さんに、和尚さまが来てくださるといいました。そこで、兄さんは、和尚さんに食べてもらうために、ご飯をたくことにしました。かまどにお釜をかけてお米をしかけてから、兄さんは、ぐつにいいました。

「おまえ、ご飯がたけるのを見ていてくれないか」

「うん、わかった」

ぐつが、お釜を見ていると、やがて、ご飯がたけて来て、ぐつぐつとあわをふきました。ぐつは、自分がよばれたと思つて、お釜に向かつて、

「なんだ、なんだ」と返事をしました。けれども、ご飯はただぐつぐつというだけです。

ぐつは腹を立てて、

「このやろう。ばかにするな」といつて、かまどの灰をつかんでお釜の中に投げこみました。

そこへ兄さんが来て、

「ご飯はたけたか」とききました。

「いくら返事しても、おらの名前ばかりよんでるから、腹が立つて、灰を投げこんだよ」

「おまえはばかだなあ。これでは、和尚さまにあげられないじゃないか」

兄さんは、仕方がないので、ご飯はあきらめて、このあいだ作っておいた甘酒をこちそうすることにしました。そして、台所の二階に上がつて、ぐつにいいました。

「甘酒の入ったひょうたんを下ろすから、おまえ、下で受け取つてくれ」

「うん、わかった」

「それ、重いぞ。大きいひょうたんだぞ。このおしりをしっかりつかまえていろ」

「よし、つかまえた」

そこで、兄さんが手をはなすと、ひょうたんは、ぴしやりと落ちて、割れてしまいました。兄さんがびっくりして下を見ると、甘酒が、台所の土間いちめに流れていました。ぐつは、自分のおしりをしっかりつかまえていました。

「ひょうたんのおしりをつかまえろつていったんだぞ。自分のおしりをつかまえてなんになる。ご飯は灰だらけだし、甘酒はこのとおりだし。もう和尚さまにさしあげるもの

は何もない。せめてお風呂^{ふろ}でもわかして入ってもらおう」

兄さんは、そういつて、いそいでお風呂^{ようり}の用意をしました。

いよいよ和尚さまが来て、お経も終わったので、兄さんは、和尚さまにいいました。

「このとおりの貧乏で、お礼に何ひとつさしあげるものはございませぬ。どうぞ、お風呂になりと入っていつてください」

兄さんは、ぐつに、お風呂をわかすようにいつけました。

「うん、わかった。でも、たきぎも何も、燃^もやすものがないよ」

「なんでも、そこらにあるものを燃やしたらいいんだ」

「うん、わかった」

ぐつは、和尚さまがぬいだ衣を火にくべました。

やがて、和尚さまがお風呂から上がつて衣を着ようとすると、衣がありません。

「これ、ぐつ、わしの衣は知らんか」

ぐつは、

「兄さんが、何でもそこらにあるものを燃やせといったから、燃やしちやったよ」といいましたとさ。

おしまい

村上郁再話

資料『北安曇郡郷土誌稿2』信濃教育会北安曇部会／郷土研究社